

人間社会学部

試験問題冊子

(A日程 2月3日)

国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄および裏面の記述式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の□内に指示された解答欄にマークまたは記入すること。なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の1～14、記述式解答欄のA～Jのみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「ミネルヴァの梟は黄昏に飛ぶ」とヘーゲルが言うように、出来事に対して思考というものは遅れる。この遅れは、構造的なものであり、必然である。つまり、この遅れは、思考が引き受けざるをえない宿命である。

しかし、キユウキヨク的にはそういう条件があるのかもしれないけれども、それでも、方法によっては、出来事の真つ最中にものを考えていくことは可能であり、私は、そういう前提で思考することになっている。

もつとも、こうした態度には、良し悪しがあつて、「もうちょっと素直に没入しろよ」みたいなことを言われかねないものでもある。たとえばドラマや映画を観ているとして、観ているうちに「この部分が面白い」と感じたとする。そうすると、ただ「面白かった」で済ませられなくなつてきて、観ながらいろいろ分析したり解釈したりしてしまう。

a、私は、出来事の真つ最中にあるとき、いつも自分が分裂している気分になっている。観ていてそれを楽しんだり驚いたりする、そういう流れに身を委ねている自分もいるけれども、他方でそこから身を引いて冷静に考えてしまっている自分がある。自分が二重化している感覚があるのだ。短期のテーマであれば、出来事の真つ最中に答えを出していることさえある。

だが、少なくとも、こうした態度をとることは、社会学という学問にとっては、宿命であり、また使命でもある。社会学は、近代に生まれた学問、比較的若い学問である。それは、〈現在〉というものを何か、自分たちが今まさに経験していることは何かということを、何とか言葉にしたいという強いシヨウドウが学問として結晶したものだ。だから、今起きていること、自分自身を含む人々が関心をもっている問題や出来事に対して何かと言えないのであれば学問としての存在理由がなくなってしまうようなところが、社会学にはあるのだ。

それゆえ、「社会学」の勉強として、教科書に書いてあることを読んだり、ずっと昔の学説を覚えたりするだけでは、ぜんぜん足りないし、意味がない。それでは、何のために「社会学する」のかわからなくなってしまう。だから、社会学の探究者は、何か「こと」が起きれば「同時代に生きる者として社会的に何を言えるか」という問いを突きつけられている。つまり、社会学には、同時代とbするということが学問的な使命として内蔵されているのである。

こうした事情は、ほんとうは社会学に限ったことではない。そもそもものを考えるところで、自分が今を生きていることとの関係で出てきているのである。いかに浮世離れしたように見える学問であっても、もとをただせばその時代とbしているのだ。人間というものは、その時代や社会に組み込まれながら、そこから出発しながら考えていくわけだから、それは当然のことなのである。

のちの章で扱うが、アインシュタインの仕事にしても量子力学にしても、自分たちとしては時代の動きなんかにはいちいち翻弄³されずに集中しながらものを考えろという仕事をしているわけだけでも、しかし実はその時代に起きている人間の精神の変化のいちばんセンエ⁴イ的な部分に深く **b** している。だからこそいい仕事のできたのである。

ただ、社会学という学問に関して言うと、その同時代との **b** それ自体を、自覚し、言葉にしようとしたところに、その顕著な特徴がある、ということはあるだろう。

さて、話をもとに戻そう。今、出来事と同時進行的に思考する、ということについて述べてきたのだが、しかし、他方で、少し時間が経ったことよってわかってくることもある。とりわけ、ものごとが「反復」されたときにそう感じることが多い。

一つ例を挙げよう。一九八八年から八九年にかけて東京・埼玉連続幼女誘拐殺人事件、いわゆる宮崎勤事件というものがあつた。そのとき、非常にショックを受けはしたけれども、すぐに自分の思考の主題にするという気持ちにはならなかつたのだ。つまり、自分の現在というものに深く染み込んでくる問題とは感じられなかつた。

ところが、一九九五年、オウム真理教事件が起こつたときに、もちろんそれは宮崎勤事件とは関係ないけれども、ある種の現代的な **c** を感じるこゝとなつた事件である。事件というのは「オタク」という言葉が人口に膾炙するきっかけとなつた事件である。オウム真理教事件でも「オタク」という言葉が浮上してきた。オウムは、「オタクの連合赤軍」などと呼ばれたりしたのだ。私の場合、オウム事件をバイカイ⁵にして、リアルタイムでは見逃していた宮崎勤事件の意味を考へるようになった。つまり、オウム事件へと至る社会の変容は、宮崎勤事件において、すでに始まつていた、ということを学問的に自覚したのである。

マルクスがヘーゲルに託して述べているように、本質的な出来事は反復する。反復されたときにはじめて思考のテーマとして明確に意識化されるようになる。

ただ、そのとき重要なのは、「それ」が反復だと気づくことである。その出来事自体が「自分はあるこれの反復です」と声を大にして言っているわけではないので、これは過去のあれの反復である、ということに自分で気づかなくてはならない。そして、気づいたときには、実は、無意識のうちですでに思考はスタートしていた、ということになる。つまり、最初の出来事のように、気づかぬうちに、思考は開始されていたのである。反復されたとき、そのことに思考自身が気づくのである。逆に言えば、〈反復〉を感じられる出来事には本質的なものが孕まれていると考へた方がよい。

出来事の反復性は何も無理して見出されるようなものではない。何か出来事が起きたときに驚きとか不安を感じたとする。そのときに「この感じって前にも受けたよな」という気分になることがある。その感覚を大切にしなければならぬ。

「この感じを受けたのはいつのことだろうか」「なぜまた感じている気がするんだろうか」と、思考を進めてみるのだ。

実際の出来事だけではなく、本を読んでもそうだ。読んでいてすぐおもしろいと感じたり感激したりする。そうしたとき、「これと同じようなことをどこかで、別の本を読んだときにも感じたぞ」というように、過去の感覚を思い出すことがある。前に

読んだときには見過ごされていたんだけど、心の底のどこかには残っていて、のちに別の本を読んだときにそれが発掘される、そういうことがあるのだ。

(大澤真幸『考えるということ―知的創造の方法』)

問1 傍線部1、2、4、5のカタカナを漢字に直して、傍線部3の漢字のよみをひらがなで、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 A 2 B 3 C 4 D 5 E

問2 傍線部ア「ミネルヴァの梟は黄昏に飛ぶ」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

1

- ① 知恵のシンボルである梟は、様々な物事が終わる日暮れにならない。つまり物事が終了してからでなければ思考することができない。
- ② 知恵のシンボルである梟は、様々な物事が終わる日暮れにならない。つまり思考が終了してからでなければ物事が始まらない。
- ③ 知恵のシンボルである梟は、様々な物事が始まる夜明けにならない。つまり物事が始まらなければ思考することができない。
- ④ 知恵のシンボルである梟は、様々な物事が始まる夜明けにならない。つまり思考が始まらなければ物事は始まらない。

問3 空欄 a に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

2

- ① なぜなら
- ② だから
- ③ しかし
- ④ たとえば

問4 空欄 b に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

3

- ① 同化
- ② 逆行
- ③ 拮抗
- ④ 共振

問5 傍線部イ「浮世離れたように見える学問」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

4

- ① 実学的な学問
- ② 抽象的な学問
- ③ 俗世間の出来事を扱う学問
- ④ 具象的な学問

問6 空欄 c に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

5

- ① 特殊性
- ② 共通性
- ③ 対称性
- ④ 神秘性

問7 傍線部ウ「それ」が指すものとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

6

- ① ある出来事の社会に与えた影響
- ② ある出来事の意味や本質
- ③ ある出来事と同時期に起きた他の出来事
- ④ ある出来事の数年後に起きた出来事

問8 本文の内容に最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

7

- ① 出来事と同時進行的に思考することは社会学にとっては必要である。
- ② 社会学は、今起きていることのみ関わる学問である。
- ③ 反復を感じられない出来事には本質的なものは含まれていない。
- ④ 出来事の反復性に気づくには、様々な領域の読書が必要である。

問題二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

今ではよく知られているとおり、大多数の富裕国における所得と富の不等、とりわけアメリカにおける不平等は、ここ数十年間で大きく拡大し、残念ながら、世界大恐慌以来のヒサンな水準¹となってしまった。では、残りの世界はどんな状況なのだろうか？中国やインドが経済大国としてタイトウ²し、億単位の人々を貧困から脱出させたため、各国間の格差は縮まっているのか？ 貧困諸国や中所得諸国では、不平等は良化しているのか、それとも、悪化しているのか？ わたしたちはより公正な世界へ向かっているのか、それとも、より不公平な世界へ向かっているのか？

これらは複雑な問題だが、世界銀行のエコノミスト、ブランコ・ミラノヴィッチらの最新の調査研究は、答えの方向性のある程度示唆してくれている。

一八世紀に始まった産業革命は、ヨーロッパと北アメリカに莫大な富をもたらした。もちろん、各国内の不平等はさまざまのものだった。一八二〇年代イギリスのリヴァプールやマンチェスターの織物工場、一八九〇年代アメリカのマンハッタン・ロウアイーストサイドやシカゴの共同住宅を思い浮かべてほしい。世界共通の現象として、富裕層とそれ以外との格差はさらに広がり、この流れは第二次世界大戦のあたりまでつづいた。今日、各国内で見られる不平等はかなりの高水準だが、当時の各国間の不平等はそれをはるかに上回っている。

しかし一九八〇年代末、共産主義崩壊のあたりから経済のグローバル化が加速し、いったんは各国間の格差が縮みはじめた。旧ユーゴスラビアに生まれ、昨年、『不平等について』を発表したミラノヴィッチによれば、一九八八年から二〇〇八年までは、「世界市民のあいだで不平等が縮小する光景を、産業革命以降初めて目撃する機会だったのかもしれない」。

一部の地域間——たとえばアジアと西側先進国のあいだ——では、格差が顕著に狭まる一方、大きな格差は依然として残っている。過去数十年間、中国とインドの力強い成長に影響され、世界の国別の平均所得は接近してきたが、個人レベルでの平等性は、どの側面をとってみてもほとんど改善されていない（不平等の指標であるジニ係数で見ると、二〇〇二年から二〇〇八年までの改善率はわずか一・四パーセントにとどまる）。

つまり、アジアと中東とラテンアメリカの国々が、全体として西側諸国に接近する一方、世界各地の貧困層は取り残されているのだ。ある程度、生活水準の向上に浴してきた中国などの貧困層でも、基本的な構図は変わらない。

ミラノヴィッチによれば、一九八八年から二〇〇八年までのあいだに、世界の上位一パーセントの所得は六〇パーセント増加し、下位五パーセントの所得はまったく変動がなかった。また過去数十年間、中位所得は大きく上昇したものの、依然として巨大なフキンコウは残ったままだ。じっさい、人類の上位八パーセントが所得総額の五〇パーセントを手に入れ、上位一パーセントだけで一五パーセントを占めているのである。最も高い所得の伸びを記録したのは、世界のエリート層——富裕国の金融機関や大企業の重役たち——と、中国やインドやインドネシアやブラジルの巨大な「新興中流階級」だった。では、負けたのは誰か？ ミラノヴィッチによれば、アフリカと、ラテンアメリカの一部と、東欧の旧共産国と、旧ソ連諸国だ。

アメリカはぞっとするような実例を世界に示している。アメリカは多くの面で、世界をリード⁴しており、ほかの国々がこれにならえば、未来には不吉な影が投げかけられることとなる。

アメリカにおける所得と富の不等拡大は、西側世界で共通して見られる趨勢の一部と言っている。二〇一一年の経済協力開発機構（OECD）の研究によれば、所得の不平等が最初に拡大しはじめた国は、一九七〇年代末から八〇年代初頭にかけてのアメリカとイギリス（そしてイスラエル）である。この趨勢は八〇年代末から世界にも伝播⁴しだした。過去一〇年のあいだに、ドイツやスウェーデンやデンマークなど、伝統的に平等を重んじる国々でも所得の不平等は悪化してきた。フランスや日本やスペインといった少数の例外を除き、ほとんどの先進国では上位一〇パーセントがさらに躍進する一方、下位一〇パーセントはさらなる凋落に苦しんでいるのだ。

a、この趨勢はあたりまえでもなければ必然でもない。同じ時期にチリ、メキシコ、ギリシア、トルコ、ハンガリーなどの国々は、所得格差の大幅な改善に成功した。ここから示唆されるとおり、不平等は政治の産物であって、マクロ経済力学の産物ではない。グローバル化が進み、労働力と資本と商品とサービスの自由な移動が可能となり、技術進歩が労働者により高い技能と学歴を求めたため、必然的な副産物として不平等が生じた、という主張は正しくない⁷のである。

ほかの先進国と比べても、アメリカは所得と機会の格差が大きく、マクロ経済に破滅的な影響を与えている。GDPは過去四〇年間で四倍以上、過去二五年間ではほぼ二倍にふくれあがったが、その恩恵はほとんど最上層に集中してきた。そして、最上層の中の最上層にますます集中しつつある。

昨年、アメリカの上位一パーセントは国民所得の二二パーセントを、上位〇・一パーセントは国民所得の一パーセントを獲得した。そして二〇〇九年以降、所得増加分の九五パーセントが上位一パーセントのふところに流れ込んでいる。最近発表されたコクセイ⁵調査の結果によれば、アメリカの中間所得の数字は、ほぼ四半世紀のあいだ変わっていない。平均的な男性労働者の収入（インフレ調整後）は四五年前よりも低く、四年制大学の学位を取らなかった人は、四〇年前より四〇パーセント近く稼ぎを減らしている⁶。

アメリカの不平等は、三〇年前に著しい拡大を始めた。富裕層向けの減税や金融セクターの規制緩和と同じ時期なのは、偶然ではない。国内のインフラ、教育、医療制度、セーフティネットに対する過小投資をつづけた結果、状況が悪化してきたのだ。不平等の拡大は、政治制度と民主的統治を蝕みながら、自己増殖を繰り返している。

どうやらヨーロッパは、アメリカという悪い手本を踏襲したくて仕方ないらしい。緊縮財政への拘泥はイギリスからドイツまでの各国に、高い失業率と、賃金の下落と、不平等の拡大をもたらしている。再選されたドイツのメルケル首相、欧州中央銀行のドラギ総裁を含む首脳たちは、ヨーロッパの諸問題の原因がふくらみすぎた社会保障費にあると主張する。しかし、欧州を景気後退に（そして深刻な不況に）追い込んだのは、まさにこの¹ような考え方だった。たとえ状況が最悪期を脱しても、たとえ不景気が「公式」に終了しても、EU域内の二七〇〇万人の失業者が救われるわけではない。相変わらず大西洋を挟んだ両岸では、緊縮財政の熱狂的な支持者たちが、まだまだ足りないとい

大声でわめきたてている。繁栄を手にしたいなら、苦い薬を飲む必要があると。しかし、
いったい誰のための繁栄なのだろうか？

(ジョセフ・E・ステイグリッツ 峯村利哉訳)

『世界に分断と対立を撒き散らす経済の罨』

問1 傍線部1、2、3、5のカタカナを漢字に直して、傍線部4の漢字のよみをひらがなで、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 [F] 2 [G] 3 [H] 4 [I] 5 [J]

問2 空欄 [a] に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① つまり ② そのうえ ③ しかし ④ だから

[8]

問3 傍線部A「正しくない」と筆者が考える理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

[9]

- ① 格差の改善に成功した国は、国内のインフラ、教育、医療制度、セーフティネットに対する過小投資をつづけたから。
② 所得と富の不平等拡大は、必ずしも西側世界でのみ見られる傾向とは限らないから。
③ チリ、メキシコ、ギリシア、トルコ、ハンガリーなどの国々では、労働力と資本、商品、サービス等の自由な移動が不可能であるから。
④ 経済活動がグローバル化する中、ラテンアメリカや旧共産圏など一部の国では所得格差の改善に成功しているから。

問4 傍線部イ「このような考え方」の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 [10]

- ① アメリカの不平等は、政治制度と民主的統治を蝕んでゆく。
② 富裕層向けの減税や金融セクターの規制緩和が、社会的一体感の喪失を生んでいる。
③ 経済的な諸問題解決のためには、更なる財政緊縮が必要である。
④ 膨張した社会保障費が高い失業率と賃金の下落を解消する。

問5 次のa～dについて、本文の内容と合致する場合には①、合致しない場合には②として、それぞれの解答欄にマークしなさい。

a アメリカの平均的な労働者の所得が過去数十年にわたって実質的に上がっていないのは、国内のインフラやセーフティネットなど社会保障費に対する過小投資を挙げた結果である。 11

b 近年では、フランスや日本やスペインなど、伝統的に平等を重んじる国々でも所得の不平等は悪化してきた。 12

c 共産主義崩壊の頃から経済のグローバル化が加速し、世界の国別の平均所得が接近するとともに、個人レベルでの平等性も少し改善していった。 13

d 一八世紀に始まった産業革命は、ヨーロッパと北アメリカに莫大な富をもたらし、富裕層とそれ以外の格差を広げた。今日、各国内で見られる不平等はそれをはるかに上回っている。 14

(以上)

